

ジャズの歴史 深まる音色

② 岡田暁生

(音楽学)

おかだ あけお 1960年京都市生まれ。大阪大学大学院博士課程単位取得退学。阪大助手や神戸大助教授などを経て京大人文学研究所教授。著書に『クラシック音楽はいつ終わったのか?』(人文書院)『音楽の聴き方』(中公新書、吉田秀和賞)『ピアノストになりたい』(春秋社)『オペラの運命』(中公新書、サントリイ学芸賞)など。

「すごいジャズには理由がある」 だくようになって、今回で5回目にと銘打ったレクチャーコンサートになる。これまでいつも満員であった京都府民ホール・アルティ(京都市上京区)で毎年5月に催させていたが、今年はとりわけ補助席まで出して全席完売という盛況となった。



レクチャーコンサート「すごいジャズには理由がある」の演奏 (京都市上京区・府民ホールアルティ)



ジャズについて語る岡田暁生教授。右はピアニストのフィリップ・ストレンジさん

第1次大戦後、米台頭で世界に拡大

ところで、このレクチャーコンサートの前身は京大人文学研究所における公開講座(人文研アカデミー)であり、2013年および14年には京大で開催していた。この企画のきっかけとなったのは、実は人文研における共同研究班「第1次世界大戦の総合的研究」であった。あまり知られていないが、ジャズは第1次世界大戦と深く結びついていて、研究成果公開の一環としてレクチャーコンサートを企画したが、すべの発端だったのである。



「ジャズ」という名称が公に登場するとされるのは1917年。オリジナル・ディキシーランド・ジャズ・バンドというグループのレコードが大ヒットし、これ以後「ジャズ」という言葉が世間に定着することとなる。そして1917年とは、それまで中立を守っていたアメリカが大戦参加を決めた年でもあった。

ちなみにロシア革命も同年だ。20世紀世界を二分することになる二つの超大国が世界史に華々しく登場した年。それが1917年である。没落するヨーロッパに対する、日が昇る勢いの若きアメリカのシンボルとして、ジャズは生まれた。

しかもジャズと第1次世界大戦の関わりは、極めて具体的なものでもあった。パリでアメリカの黒人軍楽隊がジャズを演奏して、人々を驚かせたのである。それはジェイムズ・リリス・ユーロップという人物が率いる軍楽隊であり、これはハーレムの黒人がニューヨーク市長に請願してできた、黒人だけによる歩兵連隊に属していた。ユーロップ中尉を軍

「楽」と「学」交わる瞬間「すごい」

5月にあったレクチャーコンサート「すごいジャズには理由がある」では、京大人文学研究所の岡田暁生教授(音楽学)の解説とともに、質の高い演奏が披露された。そこには、音を感覚的に味わう「楽」と、知る喜びを得る「学」が交わる時間があった。

「ジャズはやはりホーン。中でも花形はサクソス」。壇上で岡田教授が語る。今回はピアニストのフィリップ・ストレンジさんのトリオにテナーサクソス2人を加えた編成。「ピアノは誰が弾いても同じ音と言われることがあります。サクソスは人の声ぐらい個々

上京のレクチャーコンサート

で違つ。ということ、のど自慢を3秒ずつお願いしましょうか。岡田教授の進行で2人が音を出す。

演奏はアンコールも含め7曲。ジョン・コルトレインの「ブルー・トレイン」と「ネイマ」のほか「枯葉」や「いつか王子様が」のようなスタンダードを中心に披露した。合間にサクソス奏者が曲の説明やサクソスの特徴であるピブライトがクラシックに取り入れられた歴史を解説した。

サクソス陣は初心者聴き手を意識してか、おとなしめの演奏だったが、ピアノのストレンジさん

は時にコード進行の枠をはみ出すとがった演奏を見せた。ストレンジさんは、ジョー・ヘンダーソンやデイブ・ホランドといった著名演奏家と共演した名手。祇園のライプハウスでその腕前を見て、西洋音楽史が専門の岡田教授がジャズの教えを請うた経緯がある。その成果は2014年に共著としてまとめられた。その題名が公演名の「すごいジャズには理由がある」だった。

ジャズ入門者にも分かりやすく、かつ高度な演奏をホールで味わえる。すぐに450席が埋まるのには「理由」があった。(樺山聡)

文化

楽隊長とするこの連隊は、18年1月1日にフランスに到着した後、パリ各地でツアーをして、有名な「メヌフィス・ブルース」などで大人気を博した。ヨーロッパの人々はこの時初めて「生でジャズを耳にしたのである。」

俗に「クラシック音楽」と呼ばれるジャンルの黄金時代は、フランス革命から第一次世界大戦あたりまでであった。交響曲とかピアノ協奏曲とかリートなどの名作は、そのレパートリーのほぼ全てがこの時代に作られている。クラシックはヨーロッパ近代市民の時代の音楽であった。

産業革命を動力として成立した19世紀ヨーロッパ帝国主義の音楽だったといってもいい。

19世紀がヨーロッパの時代だったとするなら、20世紀はアメリカの時代である。音楽史においてもアメリカ発のポピュラー音楽が、世界を征服することになる。音楽と政治経済は不可分に結びついている。「世界音楽」は政治的ワールドパワーが生み出すのだ。

そして19世紀の世界音楽がヨーロッパ・クラシックだったのに対して、20世紀のそれはアメリカ・ポピュラーなのである。

第一次世界大戦が終了して程なく、この音楽的ワールドパワーの交代は誰の目にも明らかになった。1920年代にはヨーロッパの多くの都市でアメリカン・ダンスのためのホールが設けられ、ホテルでも専属の楽団を雇って、頻繁にダンス・パーティーが催されるようになった（銀座や上海でもそうだった）。もはや社交ダンスはフルツやカドリーユではなく、フォックストロットやシミ

ーになった。これらは当時「ジャズ」と総称されていた。ラヴェルやストラヴィンスキーといったヨーロッパ・クラシック系の作曲家たちも、ジャズに触発された作品を書き始める。アメリカの小説家フィッツジェラルドの作品タイトルの通り、20年代は「ジャズ・エイジ」となっているのである。

（寄稿）
|| 毎月第3木曜に掲載します